
ハワイ決戦

旋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハワイ決戦

【Nコード】

N75200

【作者名】

旋風

【あらすじ】

ハワイ最終決戦についてかいてみました。

ふたつの艦隊決戦

1942年9月ハワイ・オアフ島

太平洋艦隊指令部では指令長官に就任したばかりのニミッツ大将が一人で悩んでいた…

「空母が足りないのでまったく話にならない…一体どうしたらいいのだ…」

米国太平洋艦隊はマーシャル沖海戦で正規空母^{レキシントン}《サラトガ》《エンタープライズ》《ヨークタウン》の四隻を喪失していたのだ。

ルーズベルトは自体を重くみて前任者のキンメル大将が殉職した事もあり航海局長のニミッツ少将を大将に昇進させて太平洋艦隊の司令官に抜擢したのである。

本来なら太平洋艦隊司令長官となれば海軍軍人ならば名誉な事だがこの時のニミッツ大将は喜べず一人で呟いていた…

「めでたい訳があるものか…私はとんだ貧乏クジをひいてしまった…」

ルーズベルトは大西洋に配備されている正規空母及び^{ホーネット}《ワプス》に直ちに太平洋に回航するように命じた！

それでもニミッツ大将の手元にはわずかに二隻の空母しかなかった

のである…

このころ帝国海軍にはこの時点で《赤城》《天城》《葛城》《翔鶴》
《瑞鶴》《飛龍》《蒼龍》《加賀》《天龍》《赤鳳》

軽空母《龍嶽》《瑞鳳》《太鳳》の十三隻もの空母を保有していた。

圧倒戦力差で両国は対陣する事になったのである。

第2話

9月12日 太平洋艦隊指令部

ニミッツ大將がルーズベルト大統領に会いたいという申し出に対してルーズベルトは快く応じた。

「君が何を思いここに来たのかは察しがついている…空母不足は承知しているが《レインジャー》を大西洋から引き抜く事はできないそれは予め断っておく…！」

ルーズベルトがこう先に答えるとニミッツ大將は頷きながら言葉を返した。

「ルーズベルト大統領確かにお察しのとおりです！今日は空母不足にないして相談したいと思いましたが。しかし空母は私も大西洋に残して引き抜くべきではないと考えています！」

こう答えるニミッツ大將の心内はこうである…

米国にとつての正面にあたるのは、大西洋に面する東海岸であり今後とも母艦塔乗員を大量に育成し温存するべき事を勘定すると…訓練用に東海岸に正規空母を一隻は置いておく必要がある。

どの空母を大西洋に残すかについては…《レインジャー》は搭載機数80機以上最大29ノット以上で要目上は第一線空母の性能を満たしている。

だが建造年齢が比較的古くもともと《レインジャー》は空母建造の実用艦としての意味合いが強いため、艦橋などの配置など他わ年代の新しい《ホーネット》《ワプス》よりも劣っている。太平洋では帝国海軍の第一線空母を相手にするのだが大西洋の独、伊海軍には空母が一隻もない…

なので大西洋には《レインジャー》を残すべきである。

「うむ、現状では空母が三隻しかないのも、やはり《レインジャー》の回航は難しいが幸い来春には（1943年）に《エセックス級空母及び《インディペンデンス型空母》が戦力化する為手持ちの二隻でなんとかしてもらいたい…」

ルーズベルトは渋く答えるとそれにニミッツ大将が言葉を返した

「しかしながら大統領！日本の空母部隊はその実力を戦前に比べると大きく変わってきています！それに：日本は太平洋に七隻の空母を配置しており、これに対抗するには四隻は必要だと思われます！」

ニミッツ大将は強く進言したがルーズベルトは軽く答えた：

「わかっている。だが今は三隻しかないのだから、どうしようもないのだ。わかってくれ！」「確かに保有する空母は三隻です。しかし大統領！我が国には他の二隻の空母がくるではありませんか。」

「ニミッツ大将！何を馬鹿な事を言っておるのだ！我が国にやって

来る空母は米国の空母ではない！英国海軍の空母ではないか！勝手に使う事などできるか！」

ルーズベルトはニミッツ大将の発言にびっくりした：

「うーむ…ニミッツ大将よ私は君の事は誰よりも信用しているよ。だからこそ君を太平洋艦隊司令長官に任命したんだから…」

しばし二人の間に沈黙ができた：

そしてルーズベルトながい沈黙の末英大統領のチャーチルに相談する事を決意したのである…

そして1942年9月にわルーズベルトはチャーチル大統領と会談しその末英海軍の空母フィクトリアス《インドミタブル》の二隻を一時的に借りる事に成功しチャーチル大統領はルーズベルト大統領に「半年ほどお貸し致します。同盟国のピンチならば！」と快く貸してくれたのである！

幸いチャーチル大統領は海軍大臣と陸軍大臣に顔が広くきくため何の問題もなく二隻の空母をかす事が出来たのである！

そしてその後二人はチェスをたしなみこれからの方針などを遅くまで語りあつた…

ニミッツ大将もチャーチル大統領に絶対に沈めませんと約束を交わ

し空約束にだけはしまいと一段と気合いがはいったのであった！

そしてニミッツ大將は太平洋艦隊司令部に戻り一人で自室に籠り始めた…！

「まずは情報が知りたいところだな…あまりにも少なすぎる！」

ニミッツ大將は悩んだが空母がふえた事により少し気が楽になったのであった。ニミッツ大將は帝国海軍の山本大將を頭に思い浮かべて作戦をたてる事にした…

このころには多少なりとも日本の暗号を解読していたのだがまだまだ、少なく決定的な状況を掴めずにいた…

第2話（後書き）

今後ともお願いいたします。> m () m <

第3話

連合艦隊司令部

「米国相手に長期戦はできんな…しかしどうすれば頼みの吉田は日米開戦の責任をとり辞職してしまった…堀も予備役となっては…」

そう呟いていたのは、連合艦隊司令長官山本大将であった。

現状で海軍大臣は繁田太郎、軍令部総長は永野大将であった。しかしこの山本の同期の二人は対して当てに出来るものではなかった…

山本大将は完全に孤立し悩んでいた…今帝国海軍も軍令部もマーシャル沖海戦の勝利で気が大きくなっていた。

「一体米国との早期戦争終結させ和平するためには一体どうしたら…」

山本はしばらく悩んだあげく、一言呟いた…

「堀に聞いてみるか…」

そうして山本は部屋を後にした…

山本は堀を良く使っている料亭に呼び出し顔を合わせると堀はまるで山本の心中を察しているかのように会話を始めた…

「山本よ！米国とやるからには連合艦隊に全ての命運が掛かっている！」

その言葉に対して山本は…

「私もその事は良く解っている。しかし長期戦が無理だと言う事も解っている。もって一年か二年…」

「確かに…長期戦は無理だな…山本何か考えでもあるのか？」

「無くもないが…それをどうすべきか堀に聞こうとおもってすると堀は冷静に話をはじめた…

「山本よ…確かにそうだが米国のふところいきなり飛び込んでいくんだぜ！しかも空母は勝っていてもオアフ島には飛行場だってある、第一軍令部が認めないだろ。」

「軍令部は何とかしてみせる！」

「山本…もしハワイを占領する気なら陸軍の協力だっているんたぜ！どちらにせよ八方ふさがりだよ…」

山本は黙りこんで腕をくみ深くため息をついた…

山本のその姿をみた堀は山本に言い放った。

「確かに山本、俺から見てもハワイをやるしかないと思っている…ハワイをやって米国が和平に応じるかもわからん。しかしハワイを占領するしてもだそれなりの準備をしなければならんだ！今は陸軍が協力するようにもっていく材料が欠けている…海軍が独自で材料をつくるしかないだろうな！」

「はたして、そんなものが存在するのだろうか…」

「今解っている事は陸軍がその気にならないとすればやはり自軍にかかるリスクを考えているからだろう…しかしながらそのリスクを先に海軍が除いてやればいいと思う。」

山本は堀の話聞いて訳が解らなくなり頭を撫でまわし口を開いた…

「私にはさっぱり解らん！だいたい堀の考えが読めん！一体どうするっていうのだ？」

「だからオアフ島の飛行場に対抗する為に砦をもう一つ作ってやるんだよ！そうすれば陸軍も納得するんじゃないのか？」

山本はそれを聞いて考えたそしてある島の名前が出てきた…

「ミッドウェイか…を占領するというのか？」

「確かにそれもいいだろう！しかし俺の考えは砦とは空母の事だよ！それでさらに身近な所から陸軍を援護してやるのさ！」

「確かに堀の言うとおりだ！それならば、ハワイ占領の切り札になる！」

「現段階では軍令部と陸軍が納得さえすればハワイをやれる。だから空母をつくり、さらにミッドウェイを占領するのが次善の策かもしれない！」

そう堀が言うと山本も納得したらしく二人は深く握手を交わしてその日の会話は終わった。

山本は帰りの車内で。

「米国との早期和平にはまずハワイを占領するのが最善の策だと言ってくれた！忙しくなりそうだな！楽しみだ。」

山本は司令部に帰るとさっそく起案書を作ると司令部に提出した。すると案の定司令部はあっさりハワイ占領を否定してきたのである。

なぜなら軍令部は南東太平洋にしかけて米国とオーストリアとの間を遮断させる「米豪遮断作戦」をやるうとしていたからである。

しかしなが山本大将は全く興味がなくさらに軍令部を納得させる為連合艦隊戦参謀の渡辺中佐を派遣した。

軍令部側が対応したのは航空参謀の三好中佐であった。

渡辺中佐は始めにハワイ占領に対する理由を説明した。

「三好中佐！いくら南方資源を確保したって今の日本では米国を相手に戦うのは無理だ！早期に先手をとり終わらせる必要があるのだ！だからハワイ占領をやるのだ！」

そして渡辺中佐の話の黙って聞いていた三好中佐は落ち着いて対処した。

「渡辺中佐、君が言いたい事は良くわかった。しかしながらもう戦争は始まっている。米国だって馬鹿じゃないだろ？防備を固めているに違いない。そんな場所にあえて行くなんて自殺行為としか思えない！」

これに対して渡辺中佐は反論した。

「貴様何を弱気な事をそれでも帝国軍人か！確かに防備を固めているかもしれない、だか空母の数では圧倒的に有利なんだ！」

「確かに空母は圧倒的有利かもしれないが、こちらとしては渡辺中佐！ハワイを占領する気などさらさらないので！斬滅邀撃と海軍は決まっているんだ！」

渡辺中佐は今にも爆発しそうだったがグツとこらえて三好中佐に問いたざした…

「まったく軍令部は石頭ばかりだな！でわ聞かせてもらうが一体いつまで守っているのだ？」

「そんなもの！米国が降伏するまでだ！」

三好中佐も少しムキになっていた。

「何を言い出すかと思えば、降伏するまでつてあのな三好中佐！攻めてもなければ米国からすれば、攻めても来ない腰抜けに一体何処の国が降伏するだ！？軍令部は寝ぼけているのか？」

二人の会話はまだまだ続いた次第に熱を帯びて険悪な中会話が進んでいった。

そして三好中佐は苦し紛れに一言放った…

「とにかく今は、ハワイ占領は危険すぎる！しかし〔米豪遮断作戦〕は陸軍だつて同意しているのだ！戦争というのは海軍だけではできないのだ。わかるだろ？」

「言いたい事は良く解つたよ、しかしながら俺だつて山本長官に頼まれてきているんだ！無理と言われて引き下がれないんだよ。だから山本長官に聞くから少し待ってくれ！」渡辺中佐はしばらく山本長官と電話をしたのち受話器を置き三好中佐に山本長官の意見を話した。

「山本長官の意見を伝える！今回は連合艦隊が折れる！しかし、それには条件が2つある。一つはハワイ占領は山本長官の信念であるだから軍令部が近い将来必ず陸軍を説得しハワイ占領を具体化する事。もう一つ、連合艦隊はハワイ占領に変えて、今回はミッドウェイを攻略占領する！それに対して軍令部に承認していただきたい。この条件がのめないと言うのなら司令長官として国防に不備が生じ

最終的には辞職するほかないと言っておられる！」

三好中佐はしばし困惑したが、今ここで聞いても三好中佐個人で決定をくだせないので、三好中佐は渡辺中佐を連れて軍令部次長の伊藤中将の部屋に行き渡辺中佐の話について検討する事にしたのである。

まず、口を開いたのは伊藤中将だった：

「確かにハワイ占領の必要性は認めよう！だが陸軍を説得できると言う約束はできない！」

すると隣で聞いていた渡辺中佐が伊藤中将に対して提案をしてきた。

「でしたら、只今改装中の大和型三番艦《信濃》を空母にしては如何ですか？ハワイ占領に対して軍令部は依存はないのでしょうか？だから、《信濃》を空母にしてそれを中心に護衛艦隊を編成し陸軍部隊をしつかりと護衛致します！ですから陸軍と交渉して頂きたい！」

渡辺中佐が必死に説得していると伊藤中将は、その熱意にひかれて伊藤中将は山本長官と渡辺中佐に対して粘り強く陸軍と交渉する事を約束した。

渡辺中佐も伊藤中将の決意に対してこれ以上言う事はないと思い頭をさげて退出しようとしたが三好中佐が意義を唱えた…

「ハワイ占領は構わないがミッドウェイは賛成しかねます！ミッドウェイはハワイから近い！であるからして長く持ちこたえられない！」

この後しばらく討論は続いたがなんとか伊藤中将が納めて事なきをえた

そして帝国海軍は昭和17年11月にポートモレスビー攻略、12月にミッドウェイ攻略作戦を昭和18年には米豪遮断作戦を本格的に行う事になったのである。そして帝国海軍では、空母《赤城》の修理を急がせ、10月30日に終了した。

そして帝国海軍は「ポートモレスビー攻略作戦」を発動させたのであった。その結果、「ポートモレスビー攻略作戦」には、空母《翔鶴》《瑞鶴》を率いる第三航空艦隊が行う事になり司令長官は、山口中将である。

あくまでも本命はミッドウェイ攻略なので、先日軍令部からは、三、四隻の空母を求めてきたが山本長官はこれを拒否した。理由としては、連合艦隊が本土防衛に空母をのこさなければならぬので、米国にとつてもハワイ防衛の為に空母を残さなければならぬ。ニミッツ大將はオーストリア方面に全ての空母を出す訳にはいかないだろ

うから、ポートモレスビーに米国空母が来たとしても一隻が限度であるうと考えた。

仮に米国が二隻出して来たとしても山本長官の信頼が厚い山口中将ならば戦上手だから負ける事はあるまいと考えていた。

もし本当に二隻出てきたのなら、こちらとしては戦況を見て南雲中将に機動部隊を率いて出てもらい総数五隻の空母でポートモレスビー及びミッドウェイを叩く。

第3話（後書き）

かなり長くなってしまいましたすみません。m(_____)m
< m

第4話

昭和17年11月6日、0430

山口中将の指揮する空母《翔鶴》《瑞鶴》は、重巡《利根》《筑摩》と駆逐艦八隻を加えて、ポートモレスビーの南東約250海里の地点に来ていた。

ここで二隻の空母の搭載機について触れておこう。

《翔鶴》

「零戦30、艦爆21、艦攻21」計72機

《瑞鶴》

「零戦30、艦爆21、艦攻21」計72機である。

山口中将は決して警戒を怠る事をせず断続的に偵察機を飛ばしていた。

この時両空母の艦上では第一次攻撃隊が準備を終えて待機していた。

〔第一次攻撃隊〕

零戦24機 艦爆21機 艦攻18機の編成である。

そして0445計63機の帝国海軍第一次攻撃隊は発艦し進撃していった。

それを見送った山口中将は首席参謀の伊藤大佐に第二次攻撃隊の準備を急がせた。しかし山口中将はここで敵空母が来ていないと言って艦攻の半数を何も装着せずに残した。

そして第一次攻撃隊が発艦ししばらく時間がたった、艦橋などのは皆が成果報告をまちじつと待っていた。

すると、第一次攻撃隊から連絡が入った！

「我攻撃二成功セリ！戦果報告！敵戦闘機ヲ16機撃墜シセリ！才敵滑走路四本ノ内三本を大破使用不可ニシセリ！」

作戦はほぼ成功であった！しかし、入れ替わりに山口機動部隊の上空には8機敵爆撃機が襲来していた。被害は無かったものの、こちらの位置は知られてしまった事になる。

山口中将は伊藤大佐に第二次攻撃隊の発艦を命じた。両空母では、出撃命令をまつている塔乗員がまだかまだかと待ち構えていた。

しかし、その時である！全く誰もが予想すらしていなかった報告があがってきたのである！

「敵機多数！現在味方機動部隊二向ヶ進撃中！数約60機！艦上機ト思ワレル！」

最悪の事態であった！敵空母はいないとの判断だったので、両空母の艦上では地上攻撃の爆弾を装着させたままであった…

艦上機なら敵空母が近くににいる可能性が高い！しかも60機だとすれば二隻は出てきているかもしれない！爆装を魚雷に変えるべきだが山口中将にとっては状況がわるすぎたのだ！

第一次攻撃隊を收容しなければならず、第二次攻撃隊を上げ下げしている時間もない！

しかし敵空母の位置にしても全く解っていない…山口中将は困っていた…すると伊藤大佐が進言してきた。

「司令官！第一次攻撃隊を收容しませんと燃料切れになります！艦上にある第二次攻撃隊はポートモレスビーに向かわせるべきです！」

しかし山口中将は命令をださなかった…

「伊藤大佐！第二次攻撃隊には敵空母を攻撃してもらおう！全機爆装そのまま発艦させる！」

「しかし！敵空母がどこにいるかもわからないのに正気ですか！？」

「わからなければ探す他ないだろ！敵機来襲を報告してきた偵察機の位置に向かわせ索敵攻撃をさせるのだ！」

「確かにそれならいけますな！ポートモレスビーは第一次攻撃隊がほぼ無力化していますからな！幸い我が機動部隊の塔乗員はベテランですからやってくれます！発艦させます！」

そうして両空母からは、第二次攻撃隊が敵空母に索敵攻撃をするため飛び立っていった。

しかし、山口中将は出撃に対して護衛の零戦を削減したため攻撃隊は苦戦するかもしれないが現に我機動部隊には60機の敵攻撃機がせまってきたので味方空母を守る事を優先しなければならない…

山口中将は手元に24機の零戦を残したのである。それでも迎撃に不安はあるが山口中将は、第一次攻撃隊の零戦も数に入れていたのが最優先に零戦の着艦をいそがせた。そして全機補給を終えて23機の零戦が先に行っている24機の零戦を追う形で出撃していった。

米軍機にはワイルドキャットが零戦の先発と同じく24機がきていた。そして戦闘になったが同数を相手にしているので零戦ともいえど雷撃機の侵入を完全に阻止は難しかった…

それでも零戦は奮闘して機動部隊上空につくまでに、7機のアベンジャー雷撃機とドントレスと急降下爆撃機6機を撃墜した。

そして、0855遅れて発艦した23機の零戦が高度をとるその時だった！ドントレスとアベンジャー22機が突っ込んできたのである！

零戦が間に合うかどうかかわからず山口中将はただ見つめる事しかできなかつた。

すると何とか零戦が何とか食付き低空の雷撃機を4機撃墜したが残った1機が魚雷を投下してしまったのである！

最後の1機も撃墜はしたが投下した魚雷は疾走していった…零戦隊はまだ10機を超える急降下爆撃機を相手にしなくてはならないが、すでに《翔鶴》の上に群がり攻撃体制をとっていた。

零戦隊も食付こうとするが間に合わなかつた…《翔鶴》艦長有馬大佐が回避行動をとり3発は避けたが…ついに4発目が後部飛行甲板に直撃した！

ズッガン！！！！！！

物凄い衝撃がつたわった！ようやく零戦隊が間に合い襲いかかったが米国のパイロットもなかなか優秀で、2機の敵機が果敢にも零戦の攻撃に関係なく爆弾を投じた。その二発は見事に《翔鶴》の飛行甲板を貫いた！！

有馬艦長はとつさに「減速12ノット」叫び減速し始めた。

敵の空襲がおわり山口中将は伊藤大佐に被害状況を聞くと直ちに答えた…

「《瑞鶴》は無事ですが、魚雷の回避行動中に駆逐艦《不知火》と接触したのですが《瑞鶴》は問題ありません。しかし《不知火》は18ノットしか出せないそうです。」

「わかった…《不知火》は後方にさげてくれ。」

そこへ有馬艦長が報告に上がってきた…

「消化作業全て管理！10分後には20ノットの航行ができます！…しかし、発着艦は絶望的です…」

山口中将は頷き考えていた…

「問題は、敵空母か：万が一近くまで来ているのであれば、再度攻撃をくらってしまう：しかしどうしたものか：敵機は第二次攻撃隊と同じ進路で帰ったんだ、なのになぜ敵空母を発見出来ないのだ：」

山口中将は考えていた。現在は0935第二次攻撃隊が発艦して、二時間がたっていた。

すると、そこへ第二次攻撃隊長高橋少佐から報告がきた。

「ニューギニア方面南東まで達したが敵艦発見できず。敵飛行場を発見したので攻撃許可を！」

この報告を聞いて山口中将は何かを悟って急ぎ参謀に命じた！

「伊藤大佐！間違いない敵機はこの飛行場からきたのだ！すぐに攻撃許可をだしてくれ！」

そして米軍ラビ飛行場は第二次攻撃隊によつて無力化された。

そして山口中将は攻撃隊を《瑞鶴》に集めポートモレスビーにとことん爆撃を加えて昼間に加わったラバウル航空隊も加わり激しさをました！

そして、翌日護衛空母一隻と駆逐艦八隻に護衛されポートモレスビーに上陸船が進出した。

そして、攻撃隊と零戦隊により米軍の戦車や砲台などを爆撃し破壊した。そして11月9日上陸部隊は敵陣地の攻略に成功して、ついに橋頭保を確保したのである。

作者「橋頭保の保の漢字なのですが検索でなかったのあでこれを使いました(汗)あしからず 〃 (; (

第4話（後書き）

次回をお楽しみに（＾o＾）

第5話

米軍のポートモレスビー基地は持ちこたえる事ができず11月20日に陥落した。

だがニミッツ大將は2つのものを手にした一つは空母である。日本はポートモレスビーの攻撃で空母二隻と多くの塔乗員をうしなつた。そして帝国海軍の太平洋での稼働空母は五隻になり代わりに太平洋艦隊は英国から借りた空母二隻が11月22日に真珠湾に到着するこれで太平洋艦隊の空母は四隻になりその差は一隻なので何とか戦える！

もう一つは日本が使用している暗号解読であつた。それによると次なる目標は「ミッドウェイ」である事が判明したのである。

そこでニミッツ大將はルーズベルト大統領に相談しな後海軍作戦部長キング大將に依頼した。

「日本がミッドウェイを狙っているのは明白であり、敵空母を叩く最大のチャンスだと考えています！ですので大西洋艦隊にはインド洋にて陽動作戦を執ってもらいた！」

キング大將は直ぐに承認し大西洋艦隊司令長官のインガソル大將に命じた！

「大西洋艦隊は空母と戦艦三隻を伴いマダガスカルに進出してくれ！本作戦は悪までも陽動なので肝にめいじておくように！なおマダガスカルでは英国艦隊とも合流する事になっているのでよろしく頼む！」

最早日本がミッドウェイに来るのは12月の始めだと分かっているので、チャーチル大統領は、マダガスカル島最北端のデイエゴスワレス湾へ《フォーミダブル》《フューリアス》及び戦艦二隻、巡洋戦艦二隻を基幹とする部隊を派遣した。

11月20日英海軍の空母二隻と戦艦四隻、米海軍の空母一隻、戦艦三隻がデイエゴスワレス湾で合流したのである。

そして、12月23日哨戒任務に就いていた潜水艦が放った偵察機がデイエゴスワレス湾について報告してきたのである。

「湾内に空母三隻及び戦艦五隻以上及び多数の巡洋艦、駆逐艦が在泊している模様！」

そして11月中旬になりインド洋においての適の通信が急速に増えていた事から、シイロン島が危ない感じ、インド洋艦隊古賀司令部は…「今ある戦力で防衛してみるしかないのに太平洋に軽空母を回す余裕などあるまのか！本来ならこちらに援軍を送るべきだ！」

と言うように連合艦隊司令長官に対して文句が増えていた。この事態を受け、連合艦隊は11月25日旗艦《大和》作戦室で緊急会議が行われた。議長役の連合艦隊参謀長、宇垣纏中将（11月15日に中将に昇進）が喋り始めた。

「インド洋艦隊司令部が言う事もこの状況では無理ないですな…皆さんからのご意見を伺いたい。」

すると第一航空艦隊の参謀長の、草鹿龍之介少将意見を述べた。

「アリューシャン列島の天候は荒れているでしょうから仮に軽空母を向かわせても、無駄に終わる可能性だって否定できない、それよりダッチハーバーの敵航空兵力も言う程脅威にならないのでわ？だとしたら空母がなくともアッツ、キスカの占領は十分可能でしょう。」

大半の者は頷いたが、帰還したばかりの山口中将は意義をたてた。

「そうかもしれないが、万が一があるやもしれん、《翔鶴》は、厳しいが《瑞鶴》なら舷側にすこしヒビが入っただけなので、すぐ修理すれば大丈夫だ。五航戦の空母《飛龍》《蒼龍》は、ダッチハーバーを攻撃してもらいたい。そして私が《瑞鶴》に乗りミッドウェイに向かう！足手まといにはならんよ。連れて行ってくる。すると草鹿が返答したのである…」

「山口中将の御言葉は誠に有難い、しかしインド洋にいる敵空母は三隻です。だとすれば、米軍が太平洋に配備できるのは、精々みつもつても、二隻といつところでしょう。ならば、我々だけでもミッドウェイは占領できますよ。」

山口中将は、暗い面持ちであつたが、それを見て草鹿は更に言葉を続けた。

「山口中将は、いろいろとご心配されているようだが、本命は悪までもハワイにあるのですぞ！どうか、心配なさらずに、三航戦は内地にて休養をしっかりとって、ハワイ作戦に全力を注いでください！」

山口中将は、何も言わなかつた。

その頃、太平洋艦隊司令部でも同じく、作戦会議が行われていた。

まず、情報参謀のレイトンが口を開いた…

「日本空母部隊は、ミッドウェイ北西より来るとされています。さらに、12月8日早朝に、航空機による奇襲を狙っていると思われまふ！そして、日本が今回作戦で使用する空母は、五隻程です。」

ニミッツ大将が頷いた…

「五隻か…しかし、こちらにも、四隻の空母がある！上手く空母を使い逆に奇襲を行えばあるいは…」

ニミッツ大将の後にドレーメル参謀長が補足を加えた。

「四隻でミッドウェイ北西の海域にて待ち伏せをし側面から奇襲をかけます。ただ問題があるとすれば…日本の航空機の方が航続距離が長いと言う事です。」

説明を聞いていたハルゼーが、ため息混じりに言った…

「確かにな…我々の航空機は、足が短いからな…長距離攻撃は無理だな…」

隣にいたハルゼーの参謀長ブローニングが喋った。

「ボス！もし、敵機を手前で落とす事が出来ればいいのでは？」

「ブローニング、確かに妙案だが、レーダーがいくら優秀であるといっても、敵機を手前で補足は、無理だろ…それに、我が米軍の空

母が見つかってしまう可能性が高い。」

「確かに、ボスの言うとうりです。しかし、見つかってしまった空母は、長所の防御力をいかし不屈の闘志で勝利に貢献する他ないでしょう！」

そしてハルゼーは、ブローニングの言葉に大きく頷いて、しばらく考えた後、口を開いた。

「レイモンド。《ホーネット》《ワプス》を率いて後ろから付いてきてくれ！敵空母を発見したら全力で攻撃にあたるんだ！」こうして、司令部の方針が決まりニミッツ大将が命じた。

「ハルゼーには、英空母を二隻任せる。敵の搭載機がミッドウェイを攻撃したら直ちに突進するのだ！」

こうして、日本そして、米軍は、お互いに方針がきまり会議を終了した。

そして、ミッドウェイでの悪夢が着々と近づいていた…

第5話〜(後書き)

毎
回
長
く
て
す
み
ま
せ
ん
> m () m
<

第6話

昭和17年〔1942年〕12月8日0545

ミッドウェイ北西、約240海里の地点に、南雲中将の指揮する第一航空艦隊は、到達していた…

南雲中将の率いる五隻の空母は、零戦96機 九九式艦爆93機
九七式艦攻93機
二式艦偵10機 計292機にも及ぶ搭載機を準備し、他の艦艇は…
…戦艦二隻 重巡洋艦六隻 軽巡洋艦一隻 駆逐艦十五隻を従えていた。

そして、空に白みがかつた午前6時頃、零戦45機 艦爆57機
艦攻36機の第一次攻撃隊136機が発艦を開始したのである。

そして、全機が発艦すると次に南雲中将は、重巡洋艦から零式水偵
8機を第一段索敵に回し空母艦上にある二式艦偵5機も発進させた。

索敵機を発進させると、南雲中将は、草鹿参謀に話しかけた。

「草鹿君、敵空母はくるだろうか？」

「可能性は否定出来ませんが、出てきていないと私はみません。仮にミッドウェイを占領されても我々が去った後に奪還を考えていると思われまます！」

「なら第二次攻撃隊は、爆装で半数を装着せず待機させておこう！」

そして司令部の方針をつけて空母《赤城》《天城》《葛城》の9機の艦攻に地上攻撃用の800キロ爆弾を装着した。そして第5航空戦隊の《飛龍》《蒼龍》18機の艦爆に地上攻撃用の250キロ爆弾を装着したのである。

そして、その頃ミッドウェイ基地航空隊司令のシマード大佐はミッドウェイに危機が迫っている事をしている。

彼はまず0500よりPBYカタリナ飛行艇を発進させ帝国海軍の空母部隊の発見を急がせた。

すると0700頃にミッドウェイ北西約220海里に向かって飛んだ1機のカタリナ飛行艇より空母三隻発見を知らせてきたのだ！

そしてシマード大佐は全軍に報告した後、基地航空隊にも発進命令をだした。

ハルゼー提督は空母に将棋をかけた。ウイクトリアス《インドミタブル》と重巡洋艦五隻、駆逐艦十二隻を率いて出撃しブローニングが距離を割り

出しハルゼー提督に伝えた。

「敵空母部隊と我部隊の距離は、約190海里です！」

その時だった！カタリナ飛行艇より通報が入ったのである。

「敵機多数ミッドウェイ二向ウ！！」

通報を受けてすぐに、《ヴィクトリアス》《インドミタブル》は、6機ずつのドーントレス急降下爆撃機計12機が発艦する。ハルゼー提督は、爆撃隊隊長マクラスキー少佐を呼び出し伝えた。

「護衛の戦闘機は付けられない…厳しい任務だが私は君達を信頼しているからこそ行かせるのだ！なるべく《赤城》にダメージを与え無事に帰ってきてくれ！」

マクラスキーは頷いた。もともとハルゼー提督とパイロットの資格もありマクラスキーとは知らぬ仲でもなく他のパイロットからも信頼が熱く特別な信頼関係があったのだ。

そして、ハルゼー提督はマクラスキー少佐の爆撃隊が西へ進撃するのを見送ると全軍に対して突撃命令をだした。

突撃命令を受けてスプルーアンスも西へ進撃を始め帝国海軍空母部隊との距離を再度確認し幕僚に命じた。

「後少して敵空母を攻撃圏内にとらえる！発艦準備を整えてくれ！」

0740この時すでにミッドウェイ基地からは、敵空母部隊に対し、ドントレス32機、アベンジャー雷撃機12機 B17爆撃機18機が発進していた。悪までも防衛優先にして手元には戦闘機をのこした。

そして、日本航空隊と接触するであろうウエーク方面空域には、B17爆撃機を向かわせ哨戒任務につかせた。

第6話（後書き）

中途半端に切ってしまいました。が次から戦闘が始まるので切りましたあしからず。 〃 (; ()

第7話

0756空母は、ガイクトリアス対空レーダーに敵機を捉えていた。そしてその知らせを聞いた艦隊の警戒任務に就いていた、ワイルドキャット戦闘機が4機迎撃に向かうワイルドキャット4機は味方艦隊の前方約20海里の地点で敵機を発見し追撃を開始した。

この時発見されたのは、二式艦偵であった。杉原中尉が操縦している二式艦偵は4000mの高度で飛んでいて米空母を発見手前でワイルドキャット戦闘機に遭遇してしまったのだ。

杉原中尉はこの変に空母がいると思い一時的にワイルドキャット戦闘機をかわすため進路を北にとり徐々に進路を南に迂回した。

幸い二式艦偵のほうが速度が早かった。ワイルドキャット戦闘機はなかなか追いつけずまさかの速さに驚いているようだ。その隙をついて杉原中尉は徐々に東に進路を戻し、ほどなく完全に元の進路に戻した。

すると杉原中尉の目にいきなり飛び込んできたのは、何と米軍空母であった。すると後ろに座っていた電信員の大林軍曹がただちに艦隊司令部宛に打電した。

「二十隻カラナル敵艦隊発見セリ!!!空母二隻含ム!!!」

0812に敵艦隊及び空母二隻の発見を受けて南雲司令部は、あえて騒ぐ事もせず落ち着いていた。

「空母二隻がきたか…草鹿君第二次攻撃隊は基地攻撃の爆装になっている大丈夫か？」

草鹿はあっさり答えた…

「心配ありませんよ。雷装にはすぐやらせますので。」

するとそこへ第5航空戦隊の角田司令官から意見具申がきた。

「第2波は現装備で出撃し敵空母を攻撃すべし！」

これを聞いて南雲中将は呟く。

「角田司令官の意見は妥当ではないかね？」

しかし草鹿は強気になっていた…

「敵空母はわずか二隻こちらには、倍以上の戦力があります！恐る事はありません！」

南雲中将は言葉を濁しながら心配そうにいった。

「そこまで言つのら任せる…」

「大丈夫ですよ！向こうからわざわざ来たのです、正攻法で確実に仕留めるべきです！敵空母を逃がす訳にはいきませんから！」

南雲中将は下手に草鹿との信頼性を無くしたくなかったのでこれ以上何も言わなかった。

その頃、ミッドウェイ攻撃に向かった第一次攻撃隊は、0800過ぎに到着し迎撃をもとめせず爆撃をして飛行場やその他の施設に大損害を与えた。さらに攻撃隊の護衛零戦隊は、損害を出しながらも24機のワイルドキャットを撃墜し勝利を収めた。

南雲機動部隊は、着々と兵装転換をおこなっている。0815に命令だったが0930にはほとんどが兵装転換が終わっていた。

しかし、そう上手く事は進まなかった！0900過ぎから南雲機動部隊の上空にミッドウェイ基地よりドーントレス急降下爆撃32機
アベンジャー雷撃機12機 B17爆撃機18機計62機が来襲していたのだ。

南雲中将は、直ちに空母五隻から零戦52機を発進させた。零戦にとって護衛戦闘機を伴わない爆撃機は赤子の手を捻るも同然であった。戦闘は約20分ぐらい続き零戦隊は米軍爆撃隊を全て撃墜し所々爆弾や魚雷を投下されたが五隻の空母の艦長が巧みに操艦でかわし南雲機動部隊は損害艦を出さずことなく乗りきったのである。

第二次攻撃隊に随伴する零戦を降ろし補給させた。

「長官、後5分程で発進できます！」南雲に報告したまさにその時！いきなり12機の米軍爆撃隊が現れた！

しかしまだ艦隊上空には、21機の零戦が残っていたので零戦隊はすぐさま迎撃にむかった！

しかし、爆撃隊は零戦隊の動きを完全に読んでいた。編隊を解き散開したのである！

この時爆撃隊を率いていたのは、《ヴィクトリアス》飛行隊長マクラスキー少佐であった。

零戦隊が接近してくるがそんなのおかまいなくマクラスキー少佐は、《赤城》と思われる空母に標的をしぼったのである。そしてすかさず爆撃隊に散開を命じ、12機のドントレス急降下爆撃は零戦をもともせず全方向から一斉に急降下にはいった！

しかし、そう上手く爆撃も成功する訳なく、ドーントレスは残り4機に減っていた…

だが4機の爆撃隊はまだ諦めてはいなかった！零戦隊の僅かにできたほんの一瞬をつき、空母《赤城》に一齐に二度目の投下をおこなった！四発の内三発は外れたが遂に一発が飛行甲板に命中した！！

ズガアーン ドカアーン

さらに命中した爆弾は、前部エレベーター付近で爆発したため、エレベーターを使用不能にしたのである！

《赤城》はたった一発で発艦不能になってしまった…火災は収まったが、3分の1が使用できないので発艦できる状況ではなかったのである…そこに草鹿が来て南雲中将に進言した。

「敵空母を叩きます！」

「うむ！急いでくれ！」

しかしこの時にまた南雲機動部隊には最大の危機がせまりつつあった。

第7話（後書き）

何回かに分けます（汗）

第8話

その頃、スプルーアンス少将指揮下の空母二隻は、27ノットで西へ進撃していた。

そして、0840には南雲機動部隊との距離を約200海里に縮めていた。

0842スプルーアンス少将は手元に24機のワイルドキャット戦闘機を残してそれ以外のワイルドキャット戦闘機36機 ドーントレス急降下爆撃機60機 アベンジャー雷撃機32機計128機を攻撃に差し向けた！

これをスプルーアンス少将は二波に分けて発艦させた。0915に発艦は終了した。

マクラスキー少佐が《赤城》に損害を与えた事で航空機の収容にはかなり手間取っているはずだ。実際はそうであった…

しかし、時間はまっつてはくれないスプルーアンス少将はすでに128機の攻撃隊を発進させていたのだから…

しかし帝国海軍も96機の攻撃隊をハルゼー機動部隊めがけて発進していた。

1040南雲機動部隊は、対空レーダーに敵の大編隊を捉えた！

この報告を聞いた草鹿参謀は慌てて伝えた！

「攻撃隊発艦待て！！迎撃零戦隊直ちに発艦せよ！」

すぐに48機の零戦隊が発艦されたが《赤城》零戦隊長板谷少佐が敵機を発見した時には、南雲機動部隊の約15海里手前であった！！

板谷少佐は間髪を入れずに突撃を命じた！敵攻撃隊には36機のワイルドキャット戦闘機が付いていたが零戦隊は半分に分かれて波状攻撃を仕掛けた！！

数は劣つていてもやはり零戦隊は強い！あつという間にワイルドキャット戦闘機8機 ドーントレス急降下爆撃機24機 アベンジャー雷撃機18機を撃墜した！

しかし撃墜距離が近すぎたため戦闘をしている内に南雲機動部隊の上空にまでできてしまっていたのだ。

米軍にはまだドーントレス36機 アベンジャー14機が残っている！

南雲機動部隊は直ちに对空砲火をうちあげたが数機はひかかるが大多数の攻撃隊はものともせず爆弾及び魚雷を投下した！！

最初に被弾したのは、《赤城》であった、ドーントレス16機 アベンジャー6機が襲いかかった！！

雷撃機の六本の魚雷は交わしたが爆撃は二発が連続で命中！そしてさらに一発が飛行甲板に命中！

南雲中将は草鹿参謀の顔を見ながら言った…

「草鹿くん、我々は敵を甘く…見すぎていたようだ…」そして《赤城》は傾き始めた…この状況を見て青木艦長は、退艦命令をだした。そしてしばらく浮いてはいたが遂に《赤城》は波間に消えていった…

一方《天城》 《葛城》 も激しく攻撃を受けていた！

《天城》にはドントレス12機 が襲来！ 《葛城》にはドントレス6機とアベンジャー7機が襲いかかった！！

必死に回避行動をとるが米軍のパイロットも優秀であった。まず《葛城》が被弾 《天城》が二発を連続で喰らった！二隻の空母は速力が落ちた…そこにアベンジャー雷撃機7機が一斉に魚雷を放った！

速力が弱った空母に避けられる訳なく一発が《葛城》の左舷後部に直撃 《葛城》はみるみる内に速力が落ちていった…そして激しく浸水し左へと傾きはじめたのである…

上空では様子を見ていた《ホーネット》爆撃隊中隊長アーヴィン中尉が留めを指す為に《葛城》に目標を定めて列機に伝え突撃した！

そして投下した爆弾は《葛城》に最後の一撃を加えたのである…

同じに《天城》にも爆弾を加え二隻の空母は業火に見回れ助けの手だてがなかった…

南雲機動部隊は空母三隻に被害がでてしまったのである…

第8話（後書き）

次は日本が米国に攻撃します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7520o/>

ハワイ決戦

2010年11月12日13時03分発行